



日本初の遺品整理会社社長

吉田太一

孤独死大国の「天国への引越し屋」

2002年、日本初の遺品整理専門の会社を設立した。依頼の大半は孤独死。とんなに凄惨な現場でも断らな。

「遺品は人間が生きていた証」の思いを胸に、今日も死後の現場に立つ。

文 ■ 村尾国士 写真 ■ キッチンミノル

ドアを開けたら、人、異様な臭いがあふれ出てきた。臭いをかきおけるようにカーブス社の吉田太一が部屋に入っている。社員と派遣スタッフが驚いた。縦長の30Kで奥の部屋にシングルベッド。その傍の掃除の床は赤黒い大きな人形のしがらみがあり、臭いはそこから発している。派遣スタッフの一人が口をおさむ吐き気をこらえるのをろり見やり、吉田が言った。

「作業開始です」

横浜市郊外の古くマシソン。階の古くなった42歳の独身女性は不全により急死し、死後1カ月で発見された。いわゆる孤独死である。東北地方の実家とは長らく居るが、警察からの連絡で駆けつけたのは「親でしよ、姉の姿にたんだら、マシソンの大家に1日も早い後始末を要求され、運方に暮れながらインターネットで検索。遺品整理会社カーブスに届けた。弟は「仕事を休めないでやってほしい。遺品は全部処分してください」と、厳しく費用を押しつけた。

「整理作業が早い、ベッド脇のみに毛布がかけられたのが、臭いの一向は消えない。設置した消臭剤が突るオゾンと混じり、甘酸っぱい臭いが臭い。床に正座して故人の貴重品を仕分けしながら、吉田が涙ぐんだ口を開く。

「いまは名地やかこの程やけて、夏場やった

ら蛆ははやくはなくなるし、刺り臭に突っ込まれたような臭いでも、それに耐えて遺品を片付けたら、遺族に感謝されるんです」

日本初、おとろく境界でも初の遺品整理専門会社カーブスを吉田が起したのは1999年。午前東京、名古屋、大阪、福岡に事業所を構へ、これまで扱った件数は7000を超え、貴重品捜しに始まり遺族と原状回復、形分けの宅配送。費用の償まで、吉田に聞かざるはる要望に応じる。先ほどのような孤独死や自殺や急死に類するケース年間2000件は依頼される。

孤独死に呆然の遺族

「全部うちでやりますから」

吉田の遺品の仕事は、各支店を巡りながら整理作業と前段階の見積もりがメインである。その見積りに同行取材した、訪ねた戸のすべてが身元不明の死で、半数が孤独死。4畳半のアパートで床見えないほどのゴミに囲まれて発見された50歳男性もいれは、夥しい故人人形を飾った団扇の1室で、その元死んだ33歳女性もいた。依頼主は孤が遺品だが、共通していたのは、縁の薄くなる故人遺品を前にして困惑ふりだ

った。「何もれなくともいいですよ、全部うちでやりますから、やらかな間取りで吉田がそう言ふと、一様と安堵の表情を浮かべた。

核家族や少子化が進み人間関係が薄くなった時代の真相がここにある。人間の生と死を見据えた新人・空光晴は「死ぬ大には「死」は、御察であり、御かみれば、清らかなだ」

「人間の悲劇」と喝破した。死という呪いの言葉と、清といふ身もふちないそれをくつ、企業化して吉田太一である。できてははパソコンの明い、まだでなかったが不思議なほどの人間関係、作業料は遺品の多寡や部屋の状況によって異なるが、30万円前後が最多。全社員わずか1人で、昨年の売り上げは4億円突破という急成長企業が、それは有為な職業のまにに必然的につかんだビジネスでもある。

大阪の町の食店を父と弟として生きた。親やうて実母もなかった名義は、幼稚園児の息子に前年「1字も生んだら大人」とし、扱う。自分のやりたいことを、と喜んだ。小学校の入学式で「20年は」「かきせなあるが」と自分に言い聞かせたというから、かなり毛色の変った子である。実母、父はいっさい干渉しなかったが、息子の「自分のやりたいこと」を採す道のりは遠かった。